

「ネットモラルキャラバン隊」 in 香川

安心してインターネットが利用出来る「グッドネット」な環境を、みんなでつくろう！

日時：平成26年2月15日（土）13：30～16：40

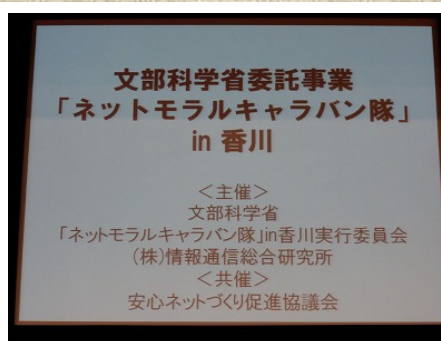
場所：サンポートホール高松 4階 第1小ホール

主催（株）情報通信総合研究所、文部科学省、「ネットモラルキャラバン隊」 in 香川実行委員会

共催：安心ネットづくり促進協議会

後援：香川県、高松市、香川県教育委員会、香川県PTA連絡協議会、香川県子ども会育成連絡協議会

プログラム：



開会挨拶 川西健雄 「ネットモラルキャラバン隊」 in 香川実行委員長

総務省説明 「ソーシャルメディアガイドラインの普及促進について」

渡邊栄一（総務省 四国総合通信局 情報通信部 電気通信事業課長）

講演「スマートフォン・SNS時代における家庭のルールづくりは？」

桑崎剛（熊本市立総合ビジネス専門学校 教頭 安心ネットづくり促進協議会 特別会員）

パネルディスカッション「子どもたちのネットモラルを高めるためにどう取り組むか？」

パネリスト：

山本正昭（香川県教育委員会 事務局 生涯学習・文化財課 主任社会教育主事）

岡見珠美（香川県PTA連絡協議会副会長、母親代表委員長、

土庄町立土庄中学校PTA会長、さめきっ子安全・安心ネット指導員）

中川斉史（徳島県東みよし町立足代小学校 主幹教諭）

工藤陽介（デジタルアーツ（株）経営企画部 コンシューマ課 課長補佐）

コーディネーター：桑崎剛（熊本市立総合ビジネス専門学校 教頭、

安心ネットづくり促進協議会 特別会員）

閉会挨拶 副実行委員長 にしきみやこ

内容：

○司会：副実行委員長 にしきみやこ

13:26～13:41 開会挨拶 川西健雄 「ネットモラルキャラバン隊」 in 香川実行委員長

（株式会社ビットコミュニケーションズ 代表取締役）

- ・一宮小学校PTA会長をやっていた。
- ・子どもを取り巻くネット環境の進展に、それを知ることも大事。ネットがらみの犯罪や、ネットいじめなど、怖い情報が流れてくるが、一方、ネットは便利なツールでもある。辞書にもなり、連絡も取りやすく、今後ますますネットを使うことは増えていく。
- ・ネット環境で、それを使うことの便利さと、気をつけることがあるのか、家庭内でのルールづくり。一方的に使わせないではなく、ルールを作り、使っていくことが重要と考えている。
- ・文部科学省の川又課長 雪のため飛行機が飛ばず、こられなくなった。総務省、桑崎さんの講演、パネルディスカッション。



- ・今回のイベントは、私自身も楽しみにしている。
- ・子どもたちのために考えられる、有意義な時間としたい。

13:41~13:44 副実行委員長 にしきみやこ

- ・昨日から羽田空港が雪のために来られなくなった。エネルギッシュな桑崎先生が、資料の説明など、文科省の取組についてもふれていただける。
- ・川西さんと事務局の渡瀬さんの個人の取組から始まっており、集客も動員もかけておりませんし、照明から音響まで全て素人が運営しています。
- ・是非、有効な時間になればと思います。



講師未着のため、中止となりました



文部科学省説明 「子供の携帯電話やインターネットをめぐる問題に関する取組

～有害情報から守るために～

○説明者：川又竹男（文部科学省 スポーツ・青少年局 青少年課長）

13:44~13:59 総務省説明 「ソーシャルメディアガイドラインの普及促進について」

○説明者：渡邊栄一（総務省 四国総合通信局 情報通信部 電気通信事業課長）

○はじめに

- ・小学生でも7.6%がスマホを所有している。
- ・高校生の55.9%、中学生の25.3%がスマホを所有（2012年11月内閣府調査）

○コミュニケーションアプリが中学生、高校生に普及

- ・中学生の92%、高校生の80%がほぼ毎日利用している。
- ・大学生は71%、社会人は48%がほぼ毎日利用している。

○ソーシャルメディアを通じた炎上事件の事例

- ・高知県の事例：コンビニ店員がアイスクリームのケースに入っている写真をFacebookで公開。

○ソーシャルメディアでトラブルが起きる背景

- ・居場所やプライバシーに関する情報を容易に発信すること、個人情報公表しなつもりでも、ソーシャルメディアに登録されている情報やその他の関連情報を組み合わせることで、個人が特定されてしまう。 → 情報リテラシーの認識が欠如していること。
- ・青少年はソーシャルメディアにリテラシーが未熟といえる ← リテラシーを持たせるのは大人の役目

○「スマートフォン安心安全強化戦略」とそれを受けた取組



- ・総務省の研究会において、スマホの安全安心な利用に関する主要な課題と対策を作成・公表

○ソーシャルメディアガイドラインの普及促進

- ・聖心女子大学が作成した「ソーシャルメディア扱いのガイドライン」
- ・スマホ18の約束（米国） スマホをクリスマスプレゼントとして渡したときの約束

○「ソーシャルメディアガイドライン」づくりのすすめ

- ・「ソーシャルメディアガイドライン」を定める場合は、子どもが社会との関わりにおいて守るべき道徳や法律、また、学校生活において守るべき校則等と同様、ソーシャルメディアの利用に関して学習する機会を必ず設け、「ただ配布して終わり！」にならないよう配慮を。

○高等学校等におけるソーシャルメディアガイドライン作成の取組

- ・先生や大人が作るのではなく、高校生に参加してもらうことが重要。

○地域における連携体制の構築と周知啓発活動の展開

- ・関係機関との連携体制を構築し、青少年が安全安心にネット環境を利用できるように。
- ・PTA会や県警、教育委員会以外の機関とも連携していきたい。

○総務省と文部科学省が取組啓発活動

- ・e-ネットキャラバン

児童生徒の保護者を対象

7年半で、全国で7,700件、103万人以上が受講

四国では、265件

- ・受講者の声

児童・生徒：よく考えもせず投稿しがちな人が多いけれど、自分が気付かないうちに加害者になっていることもあるんだと言うことを常に考えて、ネットを利用していこうと思いました。

保護者：私も気をつけて携帯を扱おうと思い勉強になりました。子どもにルールを守って使用させられるよう、我が家でも頑張ります。教師だけでなく、それぞれの立場からやるべきことがあることが意識できました。技術は日々進歩するものなので、継続してセミナーを。

教員：研修依頼、教職員の情報モラル意識が高まり、夏休み前の集会等で生徒に情報モラルのDVDを視聴させるなど、これまでにない対応が見られます。

- ・費用負担はなく、会場の手配と、参加者の募集のみで開催可能
- ・地域レベル、大人の方が公民館で勉強するような場面にも対応している。

○情報通信の安心安全な評語

- ・平成25年度の受賞作

○最後に

- ・保護者や教職員のみなさまが正しい理解を身につけてもらうことが大切。大人や教職員が正しい理解が出来ていなければ、青少年を指導は出来ない。
- ・多くの大人たちが、パソコン、スマホ、インターネットが面倒なものとの意識をお持ちではないだろうか。
- ・大人の意識が変わらないと、子どもたちの意識は変わらない。
- ・ネット利用 まずは大人が 理解して

司会：7年前に県のPTAの副会長をさせていただいたが、これほど重要な課題になっているのだと感じた。

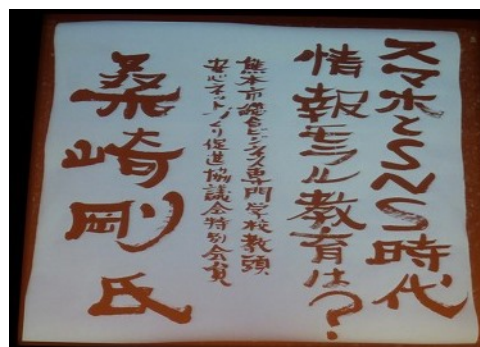
14:00~14:54 講演 「スマートフォン・SNS時代における家庭のルールづくりは？」

○講演者：桑崎剛（熊本市立総合ビジネス専門学校 教頭

安心ネットづくり促進協議会 特別会員）

○はじめに

- ・前回の講演で、書道の先生が書いてくれたものです。
- ・以前とは違った社会になっている。どこにポイントがあって、どこに課題があるのかを話したい。
- ・講演では ネット社会の現状は
青少年の現状と課題は
ネット安心ワークショップの報告



○今朝の朝日新聞の「天声人語」

- ・「スモークフリー」 タバコから解放されること
フリーはタバコが自由に吸えることではなく、タバコからの拘束からのがれること
- ・「スマホフリー」 昼休みに本を読むわけでもなく、運動するわけでもなく、話をするわけでもなく、スマホを操作していたり、スマホでニュースを見ていたりしている。
- ・スマホの束縛から離れられた人には、5千円の奨励金を払うとの会社のことが書かれていた。

○情報通信の安心安全な利用のための評語

- ・消しゴムで 消せない書き込み 慎重に
- ・子がおよぐ ネットの波に 親の網



- ・評語は立派だが、評語そのものよりも、親と話しながら、友達と話しながら評語を作ったのではなかろうか。 → 一緒に知恵を絞って取り組んだ子どもたちは、ネットスキルも高まる。

○山陰地方の大雪に閉じこめられたコンビニの配送車

- ・コンビニの配送車に満載されていたおにぎりを、渋滞で動けなくなっている人たちに配った。
「今年、初めての食べ物です」 新聞にもテレビにも掲載されなかったものが、ツイートされたことで全国に広まっている。

- ・コンビニの配送車のドライバーが、自己判断で配っている。なぜそんな判断が出来たのか。ネット情報から雪や道路の状況を確認し、積んでいる荷物を配送先のコンビニに賞味期限内に届けられないことを確信して、配った。 ← これもネット社会の効果
- ・マスコミは早くても翌日になる。ネットのスピードにはかなわない。
- ・一方、ちょっとした企業の言葉の使い方の間違いから、炎上事件につながることもある。

○ウォークマン（音楽プレイヤー）

- ・今のウォークマンは、WiFi でネットにつながぎ、曲をダウンロード
- ・ゲーム機も WiFi でネットにつながっており、インターネットトラブルはスマホではなく、ゲーム機や音楽プレイヤーで起きている。



○学校裏サイト

- ・今はほとんど聞くことがなくなったが、今はSNSや・・・に移っている。

○日本小児科医会の提言（2000年）

- ・日本小児科医会では10年以上前から、ネットの問題を認識し、取り組んでいた。
- ・スマホに子守をさせないで！

赤ちゃんの顔を見ながらの授乳

スマホの画面を見ながら、脇見での授乳

絵本の読み聞かせ

タブレットに子守をさせ

手をつなぎ子どもを見ながらの散歩

歩きスマホをしながらの散歩

○ネット社会のポイントは

- ・今までと何も変わらない ネットもリアル（現実）も同じ！
- ・自分中心から「より、更に！」

人への配慮が必要、人権の視点が

人とのコミュニケーション力が

誠意ある言動が、文書表現が

- ・学校パンフ 第1段階：撮影の許諾依頼
第2段階：この写真で掲載して良いかの許諾確認

○情報モラルの教育の指導・取組は

- ・文明の利器を賢く使えること
- ・将来の正しい指導者になれること

○子どもを守るとは

- ・幼児：手を放さず、目も離さず
- 小中校生：手は放しても、目は離さず
- 大学、成人：手も目も離して、心は離さず

- ・将来、ネット機器や交通安全に対して、「自分で、きちんと、安全に適切に対応できるように育てること」

○携帯電話の流れ

- ・第1世代：電池が1日もたない時代
 - ・第2世代：まっすぐタイプの携帯
 - ・第3世代：二折れの携帯
 - ・第4世代：スマホ
-
- ・2000年 固定電話の回線数を、携帯電話の台数が上回る。
 - ・2000年～ インターネットの普及
 - ・2007年 1億台突破 一人1台時代 ネットはPCから携帯へ
 - ・2010年～ スマホへの急激な移行とSNSの普及

○小学生の携帯電話の所持率

- ・女生徒の所持率が高い 5～6年生女子：59% 5～6年生男子：40%
- ・女生徒の事件への遭遇率が高いのは、所持率が高いから
- ・高校2年生ぐらいで、ようやく男女差がなくなる。9割以上の所持率。
- ・新たに携帯を購入しようとするスマホしかない。

○スマートフォンって？

- ・基本はパソコン 電話のかけられるパソコンである。
- ・トラブルが起きやすいアプリは、人と人が介在する、情報の発信をするアプリである。

○スマートフォンの選択理由

- ・画面の拡大が容易 シニア層にも普及

○「ネット」に「地方」はない！

- ・通話だけでは数時間も話すことは難しいが、ネットサーフなどでは数時間も使える → 睡眠時間の減少
- ・田舎でも、島でも、どこにいても状況は同じ。
- ・ビジネスチャンスでもあるが・・・
- ・離島では、他の情報源がないため、ネット漬けになっている危険が・・・

○青少年安心ネット・ワークショップ

◇第1回のテーマが「ネットいじめ」（小学生で実施）

1時間目「ストップ！いじめモードプログラム」

2時間目「目玉焼き事件はなぜ起きたのか？」

◇第2回のテーマが「ネットと防災」（中学生で実施）

1時間目「非常災害に何を持ち出す？」

2時間目「デマ情報にどう対応する？」

- ◇熊本 情報教育研究所 あさかさんから説明を
「目玉焼き事件はなぜ起きたのか？」



◇「ストップ!いじめモードプログラム」

- ・ストーリー：地球からイカゲンニ星にやってきたアース君。みんなと一緒に学級新聞作りに取り組んだが、言葉が分からず苦労します。イカゲンニ星の子ども達は、ネットにアース君の悪口を書き込みますが・・・。
- ・いじめモード 5つを提示：中傷行為、なりすまし、個人情報の暴露・仲間はずれ・暴力行為の撮影
- ・ねらい：いじめる側の気持ちを考えさせる

◇「目玉焼き事件はなぜ起きたのか？」

- ・ストーリー：事件は修学旅行の朝ご飯で起きます。目玉焼きに醤油をかけるA君は、親切から隣のB君の目玉焼きにもかけます。しかしなぜか突然、B君が怒り出します。
- ・ねらい：自分と違う考えがあることを理解し、相手の考えを受け入れる。大切なことは顔を見て言う。

- ・相手の目を見て拍手
横を向いて拍手 → **顔を見ないとどうなるかを体験させる**

- ・ありがとうございます
横を向いて頭をかきながら「ありがとう」 → **言葉だけでは伝わらないことを体験させる**

◇「ネットと災害」

- ・ストーリー
1時間目：台風が迫ってきており、避難が必要。避難に必要なものを10個選ぶ。しかし、避難途中におじいちゃんをおんぶしなければならなくなった。10個を3個に減らすには！
2時間目：架空のデマの掲示板を見せ、考えさせる。
- ・ねらい：
1時間目：災害時に必要な物の優先順位を議論し、スマホのあり方も考える。
2時間目：自分たちが情報を受信するとき、発信するときの注意点を考える。

○事例とワークショップの成果は？

- ・身近な事例は自分のこととして考えることができる
↓
・グループ討議は他の人と考えが共有できる

- ・他の人の意見も聞け、考えの幅が広がる



理解が深まる

○ワークショップの課題は？

- 1) 講師の他に各グループにファシリテーターが必要なため、人員を多く配置する必要がある。
- 2) 他のグループの発表を聞くための発表時間の確保が難しい。
※中学校の2時間目のみ班ごとに発表をした。

- ・主役は子どもたちである そのためにワークショップは有効である。
- ・ネットの分野は、指導や教え込みで育つ分野ではない。

○ネット課題の要素

- ①人間関係トラブルに関すること
- ②情報発信トラブルに関すること
- ③健康課題面に関すること
- ④情報セキュリティに関すること
- ⑤経済課題面に関すること

③健康課題

<心への影響：ネット依存>

- ・コンテンツ依存症
- ・繋がり（依存）過剰症候群

<体への影響>

- ・電磁波の影響
- ・ブルーライト症
- ・視力障害と頸椎炎等

- ・12時移行に寝る割合はスマホ所持者が多い
- ・1日何通メールする 10通以上が半分 なかには100通以上も
- ・ネット依存
コンテンツ依存 動画検索サイト、ネットサーフィンなど
つながり依存 LINE、Twitter、facebook など

①人間関係トラブル

- ・ネットいじめ（いじめ防止法）
LINEでみられた 既読トラブル、仲間外しトラブル
- ・誹謗中傷の書き込み 学校裏サイトから掲示板、ブログへ
- ・リアル以上に **コミュニケーション力が必要**

- ・小学生に多発する仲間はずれ つっついてもしじめ
高校生にもいじめが残っている より陰湿に、抜け出せていない
- ・「既読」 ← 読んでくれていない 無視されていないかと、心配し、事件に
- ・“いいよ” ok のつもりの” いいよ” が ノーサンキューとして受け取られてトラブルに

○何気なくしたことが

- ・卒業式のあとに撮影した写真を twitter にアップ、世界中に広まった写真。
- ・「日本では、卒業式にキスをしあうのか」と、これを見た外国人に認識されてしまった。
- ・16人の写真 60年後にも、世界に写真が出回っている。



- ・コンビニの冷蔵庫に入って写真 → 店が閉店 店から損害賠償（1千万円）一緒に働いていた同僚22名のバイト代（1億円）を奪ってしまった。
- ・冷蔵庫に入るようなことはしてはいけない 「規範意識」
- ・就職しようと思っている人の素性をネット検索するのは今では常識。彼の行動は、未来永劫ネット上から消せない。



14:54~15:05 休憩

15:05~16:35 パネルディスカッション

「子どもたちのネットモラルを高めるためにどう取り組むか？」

- パネリスト：山本正昭（香川県教育委員会 事務局 生涯学習・文化財課 主任社会教育主事）
岡見珠美（香川県PTA連絡協議会副会長、母親代表委員長、
土庄町立土庄中学校PTA会長、さぬきっ子安全・安心ネット指導員）
中川斉史（徳島県東みよし町立足代小学校 主幹教諭）
工藤陽介（デジタルアーツ（株）経営企画部 コンシューマ課 課長補佐）
- コーディネーター：桑崎剛（熊本市立総合ビジネス専門学校 教頭、
安心ネットづくり促進協議会 特別会員）

○桑崎：自己紹介を。

山本：元々は中学校の教頭、4人の子供を持っている。
安全指導の学習会をやっている。目玉焼きにソースをかけた友だちをどついた方です。

岡見：情報をつないでいく。自分自身、知識があるん

だろうか、一緒に勉強していきまえんかと勉強させてもらっている。一緒に考えていき、子どもたちが健康で、幸せにやっていけたら良いなあと日々がんばっている。高校生と中学生の子



ども、小学生の姪がいる。

中川：フューチャースクール 全校生徒がパソコンを持っている状況があり、情報モラルの話を。

工藤：フィルタリングの話、企業代表として、SNS事業者、情報事業者の話を。3人の子どもがいて、父親としての話も。

○桑崎：**それぞれの立場で取組紹介を。**

山本：さぬきっ子安全・安心指導員

- ・「早寝 早起き 朝ご飯」先ほどまでカルタ大会をしてきた。
- ・さぬきっ子安全・安心指導員 PTAの協力のもと、保護者に指導していこう。子どもに携帯を持たせるかの議論から始まり、毎年20人程度の指導者を育成。
- ・21年度に結成され、今年で5年目。昨年は100件の学習会を実施。ボランティアでやってもらっている。全国的にも珍しい取組。37名の指導員の方が活動中。
- ・先週も、研修会にボランティアで集まっていた。
- ・指導員に興味のある方は、香川県のホームページを見ていてください。ご協力ください。



桑崎：茨城県でもローカルで活動が進んでいる。地域のことは地域で守る。ゲーム機メーカーの作成したチラシ(ペアレンタルコントロール機能の活用について)は、お手ものに配布したもの。

岡見：一保護者として

- ・一保護者として、家庭の役割を考えていた。
- ・指導員の中には、消費生活指導員、情報関係企業の方など専門家の方も。どうしていけばいいのか学習会で議論し学んでいる。
- ・子どもがニンテンドーDSでLINEをしていて驚いたという保護者
- ・家庭の役割は：子どもの自立と社会性を育てる躰と癒し 相談できる関係づくり
- ・手は離しても、子どもを観ていること
- ・たとえばこんなルール
 - ・電話番号、アドレス、画像、サイト登録、悪口、安易に勝手に書き込まない
 - ・1日30分、夜9時まで、週1日は使用しない日
 - ・ながらスマホ・ながらゲームをしない生活
 - ・早寝早起き朝ご飯 挨拶 手伝い 外遊び
- ・ゲーム依存にさせるあやまち？
 - ・ゲームを幼い頃から始める
 - ・ゲームが身近にある
 - ・ゲームをダシに使う
 - ・あともう1レベルの罠にはまる
 - ・親が弱腰になる



- ・こんな子どもは依存しにくい
 - ・日頃から家族の会話が多い
 - ・両親 兄弟 家族仲が良い
 - ・生活習慣のパターンができている
 - ・学校が楽しい
 - ・夢や希望を持っている スポーツ等打ち込めることがある
 - ・信頼できる友だちが居る
 - ・行動に責任を持ち優先順位をつけることができる
- ・こんな依存者に発生している問題
 - ・身体的：体力低下、運動不足、骨密度低下、低栄養、肥満、腰痛、・
 - ・
 - ・
- ・“つ”のつく年齢までの生活習慣、躰が大事
- ・挨拶をしよう運動など、子どもたちのためにやっていきたい。

桑崎：

- ・緑のチラシ「お子様が安全に安心してインターネットを利用するために保護者ができること」
- ・友達の保護者と連携しましょう 家庭だけでうまくいかないところも

中川：学校現場の取組

- ・徳島県東みよし町立足代小学校
 - ・タブレットパソコンが一人1台に配備されている。体育や運動場、音楽室、委員会活動など、日常的に使っている。
 - ・1年生をどう守る
 - ①きかい
 - ②じぶん
 - ③ともだち } まもる
 - ↓
 - ④たのしい
 - ⑤じゆうに
 - ⑥できることがふえる
- ・1年生の時のルールは、高学年になっても引き継がれ、もうルールを教える必要はない。
 - ・高学年になるにつれ、自分で自分の規律を守る
 - ・使ってこそ、いろいろなことがわかってくる。出会いの時に、どれだけ、大事なことを教えておくか。



桑崎：四国で1校ですか？ ← 全国で10校です。

- ・先ほどの大学生の話ではないが、守るべきことをどう教えるか・・・

工藤：企業の立場から

- ・フィルタリング製品の提供によるネット環境の健全化
- ・「フィルタリング」や「機能制限」で知識が不十分な子どもの危険を回避
- ・**フィルタリングや機能制限が考えるきっかけに。しかも、親は全部自分で教えるより「楽」。**
 - ・なぜ、このサイトやアプリがブロックされたのかを考える。
 - ・親に利用したいと相談して、一緒に考える。
- ・「スマホにひそむ危険 疑似体験アプリ」 無料で8つの危険を全て体験 「スマホにひそむ」で検索。

桑崎：西日本地方に啓発活動が多く、地域差があるのが課題。

- ・フロアから課題とか、ご意見、感想、質問を。

男性①：感想です。先ほど、スマホで危険性を疑似体験出来るアプリの紹介があった。分かりやすく危険性を疑似体験出来るツールはおもしろいと思った。そのなかで、「子どもと一緒に考える」との話があった。「このアプリを使いたい」とか「このサイトにアクセスしたい」といったことを子どもが親に相談し、そこでどうするかを一緒に考えていくとの話があった。子どもがどのような使い方をするか分からないし、親がネットのことを全て把握することは困難なのだから、一緒に考えることの大切さを感じた。



工藤：北海道の啓発で字ばかりで読みたくない。教育の現場で、「こんなのが欲しい」というところからプログラムをさせていただいた。本日も、いろいろな意見を聞きたい。

桑崎：親がネットのことの全てを知ることは出来ない。このことについて・・

山本：携帯が壊れて、「スマホにしようか」と言ったら、子どもは「父さんには似合わん。やめとけ」と。携帯にした。

- ・教育4訓 肌を離すな 手を放すな 目を離すな 心を離すな
そういうことが子どもとのコミュニケーションに大事。「ごはんですよ」を携帯で言う。2階に
いると思っていた子どもが外から帰ってくる。

桑崎：こんなアプリから親子の会話のきっかけにさせていただき、うまく使う。そのためには、もとのコミュニケーションがよくないといけない。

中川：親子で「わが家のコンピュータールール」を作ることを、冬休みとかの長期の休みの場で作ってもらう。ルールづくりが親子のコミュニケーションのきっかけとなる。

岡見：気になっていることは、子どもたちは学校で教えてもらえる機会が多くあるが、問題は（勉強する機会の少ない）保護者の方かな。

桑崎：

- ・「ケータイ&スマホを持つための契約書」 親子で考える場の提供になる。
- ・ネット社会はどんどん変わっていき、親がネットのプロであり続けられないし、あり続ける必要はない。
- ・スマホも昔はマニアな男性の2台目としてしか売れないと思っていたものが、一般の方々に広く普及し、今の状況。
- ・LINEさんとDNAさんが来ている。

LINEの高橋：

- ・昨夜、飛行機に6時間閉じこめられました。24時間かけて高松にきました。
- ・日常の使い方、問題を起こさせない仕組み。使い方をどうさせるかに重点を置いて啓発活動をしている。
- ・学校から聞くのは、「親がLINEをつかってのけ者になっているのを子どもが観て、子どもが真似をする」。親への啓発活動をどうやるか。
- ・熊本の防災の啓発活動 真似をしたい。教育にお役に立てればと。

DNDあさくら：

- ・飛行機が朝6時にキャンセルとなり、急遽、新幹線に乗り換えて来た。しかし、岡山で人身事故があり遅れて、8時間かかった。
- ・2009年頃から犯罪につながるような話が騒がれて、エマというフィルタリング技術が確立されてきた。
- ・年間30回ぐらい啓発活動。今年は年間200回、トータル2万人ぐらいの研修をやっている。
- ・子どもがどうやってSNSを使っているかを親が知りたいと、実際に端末を使う研修をやっている。
- ・スマホやタブレットの普及、携帯や音楽プレイヤーがネットにつながる環境となり、声かけが増えていると思う。
- ・小学校に呼ばれる機会が増えている。小学校によって、地域の環境が違う。田舎では学校の統廃合でバスで通学し、放課後学校で遊ぶことが少なくなり、ネットで遊ぶことが増えている。
- ・学校で、地域で、子どもたちを守る活動が大事。

桑崎：成熟したネット社会のために、やっと動き出しているということを知っていただけたと思う。

女性①：小豆島で消費生活相談員、ネット指導員もしている。

- ・消費生活指導員は、ネット被害に遭わないように、専門家や弁護士の講師の方の研修を受けているが、「ネットのことがわからないのなら、消費生活相談員をやめなさい」と言われ、「ネットのことがわからないなら、消費生活指導員や教員をやめなさい」となってしまう。
- ・なかなか連携が進んでいない。今日も文科省と総務省は来ているが、消費者省は来っていない。
- ・ネットのトラブルといってもいろいろなものがある。料金や時間の浪費、異常情報への警戒意

識は高いが、通常のネット商品への知識や警戒が少なく、大人への啓発が重要と感じた。

桑崎：

- ・ 2年前の月刊「消費生活」に長坂さんが論文を買っている。スマホが普及する前の論文。
- ・ 消費者という立場で見るネットのモラルは、別の問題がある。
- ・ ネットに詳しい人が、必ずしも良い情報モラルの教師とは限らないと思うのだが。

中川：ある程度のベースとなる知識が必要と言うこと。食物アレルギーについて養護教育はもとより、担任の教諭も知っておかねばならないと言う時代かな。

山本：共通認識として知っておくべきことが増えているのは現実。しかし、全てを知っておくことは無理で、それが組織力、チーム力だと思う。

工藤：

- ・ 「企業の協力がなければこの問題は解決できない」と、校長先生にも言っていたのだが、このようなことはまだまだ限定的かな。
- ・ LINE DNA 今日集まっているのは気のいいおじさん

桑崎：

- ・ ネットの専門家はいない。法律分野でネットの専門家は数名しかいない。
- ・ ネットが急速に普及し、国民生活に浸透しているのに、ネットの専門家がいなのが現状。
- ・ ネットは刻一刻変化していき、あれだけ人気だったアプリが廃れたり、一気にブームになったりと。

女性②：香川県の教育センターの相談員

- ・ ネットのトラブル相談をしている。私たちに相談が来るのは被害である。
- ・ LINEでのいじめが中高生で増えている。メールでの中高生からの相談が、今年度は急増している。
- ・ 「家の人や学校で相談しやすい人はいますか？」 学校名がわかれば学校にも伝えている
- ・ 2通目の相談で 学校の先生に相談したが「そんなのは気にするな」と言われた。LINEはどんどん広がり、本人のいやがる画像が広がっていく。グループ外し。「おまえ、こんな書かれていたぞ」とのことで、悩んでいる。
- ・ どう指導してあげればいいのか。

中川：道具の話なので、道具があると力が倍増する。大人の世界、シニアの世界でも起こっている。これは人間の問題、人権教育のところ、いかに子どもの心に切り込んでいくか。だからこそ人権教育と絡めた情報モラルのことが大事。

桑崎：**基本は人間関係のトラブルが、ネットで起こっているという話。**

女性②：人間関係に問題があるわけではなく、ふざけて寝顔をウェブにアップしたり、IDロックをはずしたり・・・

山本：

- ・ふざけるというのは、良い人間関係ではない、良い友達ではない。
- ・人間関係はフェースツーフェースでないと、文字だけでは絶対にわからない。見えないところでは、お互いに疑心暗鬼になってしまう。ウェブは便利なものではあるが、所詮機械であり、100%使えられない。
- ・誰かに聞いてもらいたいからセンターに話した。誰にも話せないから、センターに話した。
- ・子どもが相談しなければならない状態にまで至ったプロセス、思いがあったのかな。現場にいて、助けてあげられなくて、つらい思いをした。
- ・聞いてあげることで、聞いてあげることから始まるのでは。

桑崎：

○家庭でのケータイ利用に関するルール

昔は黒電話は居間にあり、電話を取り継ぐというフィルタリングがあった。

子どもが悩んでいる姿に気づくことが原点ではないか。

- ・自宅内では居間で使うこと（FBIも推奨）
- ・食事中や懇談中、深夜には使用しないこと
- ・一定の金額以上は使わないこと
- ・学校での使用は、学校のルールに従うこと 他人を傷つけるような使い方をしないこと
- ・送信者不明のメールや知らない者からのメールが来た場合は速やかに親に報告すること
- ・ルール違反や携帯電話の使用によって日常生活に支障が生じている場合には携帯電話の利用を停止すること

（警察庁 バーチャル社会のもたらす弊害から子どもを守る研究会報告書より）



○ルールが大事なのではなく、作るプロセスが大事なのだ。

○ルールづくりの視点（熊本大学法学部 岡田教授より）

- ①子どもと話し合ってルールを作ること
- ②子どもが守れるルールを作ること
- ③ルール違反が明確になるルールを作ること
- ④ルールを気分だけで運用しないこと
- ⑤違反があった場合、次はどうすれば違反しないか子どもと共に考えること（ルール違反への罰を厳しくせず）

○ベネッセの調査

- ・親の子どもへの関心が高い子ほど、子どもの規範がしっかりしている

○ネット親力チェックシート

○ネットの専門家になる必要はない。

- ・子どもの変化に敏感な教員、親である必要がある。
 - 子どもの変化SOSに敏感になる
 - 急にケータイと距離をおくようになる。
 - 話しをしなくなる。呼び出し音にビクビクする。
 - ケータイのことを話すと怒るなど・・・
- ・トラブルが起こったら
 - 絶対に仕返しをさせない。加害者になる。
 - 困ったら専門機関に相談する。
- ・家庭のルール作りが話し合える親子関係を！
- ・携帯を所持する以前が大事！

○思春期は、周囲から離れ、心理的な自立に向けた準備を進める大切時期

- ・友人関係を中心に社会性を育む時期でもある。
 - 生徒自身が、「こういう使い方は危険、してはいけないな」、「今日はケータイをやめて勉強しよう」などと、携帯電話の使い方を**自発的にコントロール出来る**ようになることが重要である。
 - ※外圧よりも**内発的な意識改革**が大事である！

○親の役割 ポイント

- ・子どもが病気になったら・・・
- ・診療科を選択する。
- ・受診する。治療。経過観察、再発防止。

- ・子どもがネットトラブルにあったら・・・
- ・対応方法の選択。
- ・アドバイス。見守る。再発防止を相談。

○ネット社会のポイントは

今までと何も変わらない。ネットもリアル（現実）も同じ！
自分中心から「より、更に！」
人への配慮が必要、人への視点が
人とのコミュニケーション力が
誠意ある言動が、文書表現が

○企業が求める能力は

- ・コミュニケーション能力
- ・人と会話をしないと、ぶつかるとか議論するとかしないとコミュニケーション能力は育たない。

○65%の数字は何でしょう？

- ・ 15年後に小学生が就くであろう職種は、今は無い職種に65%が就く。
- ・ 今のネット企業は15年前には無かった。
- ・ 15年後に生きていける子どもをしっかりと育てる。
- ・ **地域のネットスキルは地域で守る。**

16:35~16:40 閉会挨拶 副実行委員長 にしきみやこ

- ・ フロアからのご意見やご質問など、問題意識を持ってご参加いただいたことを感じた。
- ・ 東京からとか、お来いただきありがとうございます。
- ・ 大会会長の川西さん、26歳の事務局の渡瀬君 個人的に桑崎先生とやりとりをしながら、今日の会となった。文科省の委託事業をやれたことに感激、啓発を進めていけたことに感謝。
- ・ 私も、怒濤のような子育て、PTA活動だったが、子どもがいたから出来た。
- ・ 子どもは大人の二番でもなく、成長していく。男の子、女の子の親としての思い。
- ・ アンケートにご協力を。

— 以上 —

